「なお実を実らせて歩む」　　詩篇 92 篇 1～15 節

主の 2021 年を迎えました。あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願いいたします。

昨年は、世界中がコロナウイルスに翻弄された一年でしたが、ウイルス感染は今も拡大し続けています。今年も感染防止対策を続けなければなりません。ウイルスには年末年始だけでなく、年の区切りもありません。私たちは一年の初めに、今年の目標をと思いを巡らしますが、私たちの人生には、本来は『今年は』とか『来年は』という区切りはありません。今だけということも、一区切りということもありません。特に昨年を振り返りますと、様々な活動が制限されていましたので、昨年の歩みは今年にも引き継がれていると考えるべきでしょう。昨年は「多くの実を結ぶ」という聖書のみことばを心に留めましたが、今年最初の日曜日にお開きした聖書のみことばは、詩篇 92 篇 13～14 節の「彼らは　主の家に植えられ　私たちの神の大庭で花を咲かせます。彼らは　年老いてもなお　実を実らせ　青々と生い茂ります。」でした。ここに「なお　実を実らせ」とありますが、昨年の願いが継続していることを覚えつつ、この年の歩みを進めていきたいと思っています。

実を実らせるための 3 つの「良いこと」

詩篇の記者は初めに実を実らせるための 3 つの「良いこと」について語っています。それは「感謝」と「讃美」と「宣教または証し」です。1～2 節に「主に感謝することは　良いことです。いと高き方よ　あなたの御名をほめ歌うことは。朝に　あなたの恵みを　夜ごとに　あなたの真実を告げることは。」と歌っています。「主に感謝する」感謝、「あなたの御名をほめ歌う」讃美、そして「あなたの真実を告げる」宣教または証しです。この 3 つの「良いこと」によって実を実らせる歩みへと導かれるのです。

そのように語った後に、それは神の御手のみわざとみこころによって喜びを得たことから生まれるとうたっています。4～5 節を見ますと「主よ　あなたは　あなたのなさったことで　私を喜ばせてくださいました。あなたの御手のわざを　私は喜び歌います。主よ　あなたのみわざは　なんと大きいことでしょう。あなたの御思いは　あまりにも深いのです。」と記されています。神のみわざの偉大さを知り、喜びにあふれてうたっているのです。神の大きなみわざを喜び、また神の「御思い」、つまり神のみこころの深いことを知って喜ぶ、それによって「感謝」と「讃美」と「宣教または証し」が「良いこと」だと分かったと言っているのです。

感謝と讃美と証しに生きる者は実を実らせる

更にこの後に、神に信頼しない者を「無思慮な者」「愚か者」と言い、神に信頼する者を「正しい者」と言って対比しつつ語り、感謝と讃美と証しに生きる者、つまり「良いこと」に生きる者の幸いを教えています。

まず 6 節に「無思慮な者は知らず　愚か者にはこれが分かりません。」と、神のみわざとみこころが分からない者のことを語っています。7 節では、彼らは「青草のように萌え出で」と言っていますが、この「青草」は雑草です。背丈の短い草のことです。この草が生え育つことにたとえているのです。「萌え出で」という言葉には、栄えるとか成長する、芽生えるというような意味があります。雑草は抜いてもすぐに生えて来て、油断しているとあっという間にはびこってしまいます。その成長のすごさに驚きますが、そのように「無思慮な者」「愚か者」、つまり神に信頼しない者は栄えているように見えるのです。しかし雑草がやがて枯れてしまうように、彼らもまたあっという間に「不法を行う」、そして悪の「花を咲かせ」るというのです。神のみわざとみこころが分からない者は、この世での成功や繁栄に「萌え出で」るのですが、彼らは「永久に滅ぼされる」、神の祝福にあずかれないと告げています。9 節では「不法を行う者はみな散らされます。」と言っています。神のみわざと御思いを知ることができない者は、見た目には栄えているようであっても、神の祝福を得ることはできないのです。

一方、詩篇の記者は、神に信頼する者への神の祝福について 10 節以降に次のように歌っています。「あなたは　野牛の角のように私の角を高く上げ　私にみずみずしい油を注がれました。私の目は　私を待ち構えている者どもを

眺め　耳は　私に向かい立つ悪人どものことを聞きます。」と教えています。「角」は神の祝福によって力づけられることを意味します。そして「みずみずしい油」は、神の御霊によって与えられる新たな喜びを示しています。更に、「私の目は…耳は」と、信仰の目を開いて正しく見ること、信仰の耳によって聞き分けることができると讃美しているのです。そうして 12 節に「正しい者は　なつめ椰子の木のように萌え出で　レバノンの杉のように育ちます。」と、神の祝福にあずかる幸いを歌っているのです。「愚か者」にも使っていた「萌え出で」という言葉が、ここでは神に信頼する「正しい者」の姿を示すためにも用いられています。神に信頼しない者は「青草」、つまり雑草でしたが、神に信頼して歩む者が「萌え出で」ると、多くの実を実らせる「なつめ椰子の木」のようになり、また空高くそびえる「レバノンの杉」にたとえることができるというのです。なつめ椰子は人の一生よりも長く豊かな実を結ぶのだそうです。またレバノン杉は真っすぐに成長し、優れた木材として用いられます。なつめ椰子やレバノン杉のように、実を結び成長し神の祝福にあずかる幸いがここに歌われているのです。それは霊的な成長です。信仰によって実を実らせるということです。

こうして、13 節に「彼らは　主の家に植えられ　私たちの神の大庭で花を咲かせます。」と、エルサレムの神殿の庭に植えられ成長する、とその祝福を言い表しています。神の庭で、神によって育てられる、つまり神の恵みにあずかることを教えています。「主の家」「神の大庭」、今の時代において、それは教会の交わりの中にあってと言うことでしょう。しかも「植えられ」という言葉は移植するという意味の言葉ですから、以前はその交わりの中にいなかったのに、今はそこに置かれて「花を咲かせ」る、祝福を証しさせていただくと言っているのです。

そうして、この豊かな恵みの中で「彼らは年老いてもなお　実を実らせ　青々と生い茂ります。」と、14 節に語られています。「年老いてもなお」と、その恵みがいつまでも続くことを約束しています。高齢になってからというのではありません。「年老いてもなお」と言うのですから、若い日からの歩みにおいても多くの「実を実らせ」、更に高齢になっても実を実らせるということです。

「実」とは成功して儲けたとか実績をあげたとか、有名になったというようなことではありません。それは信仰による「実」を実らせるということで、霊的に「成熟」することです。ヘブル人への手紙 6 章 1 節に、「私たちは、キリストについての初歩の教えを後にして、成熟を目指して進もうではありませんか。」と書かれているような、信仰の成熟のことです。それを植物が実を結び、またその葉が生き生きと茂っている様子にたとえて、「実を実らせ　青々と生い茂ります」と教えているのです。ガラテヤ人への手紙 5 章 22～23 節に記されている御霊が結ばせてくださる実、「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」、そのような実を実らせるのです。また宣教の働きの実が実り、救いにあずかる人が起こされることでしょう。

まとめ

「多くの実を結ぶ」ということ、「なお実を実らせて歩む」ということ、それは一時茂ってもやがて枯れてしまう「青草」とは違って、「なつめ椰子の木のように萌え出で」て芽生え育ち実を生らせ、「レバノンの杉のように」天高くそびえるように恵みの高嶺を目指すことです。ですから「年老いてもなお」と、今も後もいつまでも「実を実らせ　青々と生い茂」るのです。

コロサイ人への手紙 1 章 10 節には、「良いわざのうちに実を結び…成長しますように。」と書かれていますが、感謝と讃美と証しという「良いこと」に生きる者は、信仰において成長し、必ず実を実らせます。新しく迎えたこの年も、神のみわざとみこころを知って感謝し、そのみわざとみこころに讃美をささげ、それを伝え証しして、引き続き「なお　実を実らせ」つつ歩ませていただきましょう。